「酪農学園の歴史に新しい１ページを」

北清企業株式会社
佐藤　恒平

平成10年４月より、酪農学園大学に新しく「環境システム学部」が設立され、我々はその第１期生として全国各地、十人十色の信頼なる仲間達と共に、緑あふれる北海道江別市の大地で４年間を過ごすことができました。

「新設の環境学部」「手探り状態の学部」という非常に厳しく、また世間の関心が非常に強い分野を専攻しているという事で、諸教授も我々学生も良い意味でプレッシャーとの戦いでもあったように思います。我々「地域環境学科」の特徴としては、「新しい」という事を追い風に、大まかな分野を「自然環境学」と「社会環境学」へ二分化し、そこから更なる専門分野へと発展応用することのできる、方向性が非常に広く、多用な学科であったと思います。

４年間を経て、我々は地域環境学科の第１期同窓生となり、早くも平成16年の春には第３期同窓生を迎えることとなりました。しかしながら、同窓会としての歴史は未だ浅く、第１期生である我々の中から役員を選抜し、２期生・３期生から役員を数名選出し、この先長く続いて行くであろう「地域環境学科同窓会」の土台を作っている次第であります。活動自体も、役員全員が新卒であり、社会人１年目・２年目という境遇の中、目の前に在る事全てが勉強とも言える社会生活に追われながらなもので、思うような取り組みも間々なりません。同窓会のみならず、校友会の活動につきましても、大変御迷惑をお掛けする事になろうかと思いますが、諸先輩の方々におかれましては、全てが未熟者の我々に、温かな御支援と御鞭撻を賜わりたいと存じます。

（地域環境学科１期、2001年度卒）

同窓会校友会事務局より

校友会事務局長　工藤　英一

厳冬の候、皆様いかがお過ごしでしょうか。このところ畜産をめぐる環境は大変厳しく、BSE、鶏インフルエンザなど農業・畜産に関して消費者の注目が集まっております。

酪農学園は創立以来昨年で70周年を迎えましたが、今日のように消費者の安全性に対する関心の高さ、輸入にかかわって生じてくる問題の大きさ、異常気象の多さ、全て「食」に関連しておりまして、酪農学園大学の社会的責任の大きさを痛感いたします。

酪農学園大学の創立者の理念である「三愛主義」、「健土健民」は、現代になってますます重要な視点となってきております。技術オンリーの生産効率主義が陥る危険性に対しての大きな警鐘であると、肝に銘じてより安全な食材を消費者に届ける努力を怠ってはいけないと思います。このことは生産者のみでなく、流通段階、さらには消費者段階それぞれの努力と相互理解が求められます。

幸い酪農学園大学の卒業生は生産から流通・消費の段階まで、環境関連も含めあらゆる分野で活躍しています。同窓会活動はそのような卒業生といかに日常的に連携して酪農学園の理念の実現を図るか大変重要と考えますが、残念ながら必ずしも相互連携が図られているとはいえません。

校友会としましてはこのような現状を少しでも改善するために学科別に同窓会活動をホームページで公開することにしました。出来たばかりですが、各界で活躍されている卒業生を紹介しながら、活動を展開したいと考えておりますのでよろしくご指導ください。

〈HPアドレス：http://dousoukaikouyukai.web.infoseek.co.jp〉

2003年度酪農学園大学同窓会校友会理事・代議員会報告

５月24日（土）2003年度同窓会校友会理事・代議員会が野幌町「あおい」にて開催された。（出席者17名、委任状43名）石田校友会会長の挨拶に続き第１号議案；2002年度事業報告、収支決算、第２号議案；2003年度事業計画、収支予算、第３号議案；2003年度校友会・連合会・学園の役員について、その他を慎重に審議しました。新校友会事務局長に工藤英一氏（農経４期）が就任されました。

会計報告　2002年度決算および2003年度予算について下記のとおり承認された。

一般会計報告（単位：円）

収　入

項目	2002年度決算	2003年度予算	
前年度繰越	10,172,387	9,236,973	
分担金	2,832,000	2,850,000	950名×3000円
利息	2,473	5,000	定期・普通預金利息
助成金等	10,000	10,000	
雑収入	26,000	0	
合計	13,042,860	12,101,973	

支　出

項目	2002年度決算	2003年度予算	
会議費	80,844	100,000	理事・代議員会他
連合同窓会	640,200	640,200	負担金
連合同窓会事業支援費	1,500,000	0	小公園整備
在学生関係	100,000	150,000	白樺祭支援
会報関係	207,425	200,000	印刷代
コンピューター費	49,875	100,000	ハードディスク修理他
人件費	1,019,996	1,200,000	
通信費	38,392	50,000	電話代、郵送料
旅費交通費	45,660	50,000	理事・代議員会旅費
慶弔費	0	50,000	
消耗品費	123,495	100,000	事務用品費、雑費含
合計	3,805,887	2,640,200	

収支差額

	2002年度決算	2003年度予算	
	9,236,973	9,461,773	

2003年度校友会役員

会　　長　石田貞夫（酪農１）
副 会 長　野村　武（獣医１）・木村栄ノ進（農経５）
事務局長　工藤英一（農経４）、他理事、代議員、監事

2003年度各学科同窓会事務局長

酪農学科　野　英二、農業経済学科　加藤　浩、
獣医学科　植田弘美、食品科学科　岩崎　智仁、
食品流通学科　西田　智、地域環境学科　吉田陽平、
経営環境学科　仲野恵子

事　務　局　だ　よ　り

学園の施設が次々と新しくなってきていますが、この同窓生会館はタイムスリップしたかのように、とんがり帽子の塔を乗せて建っています。外に目をやると時折エゾリスが走り回り、愛くるしい姿に見とれてしまいます。忙しい日々の中で、ふと昔を思い出した時同窓生会館を訪れてみませんか。昔の資料等を展示してお待ちしております。（S・K）

酪農学園大学
RAKUNO GAKUEN UNIVERSITY

校友会会報

第 10 号
2004年１月15日
編集・発行
酪農学園大学同窓会
校友会会報編集委員会
〒069-8501 江別市文京台緑町582
同窓生会館内
☎（011）386-1196
FAX（011）386-5987
HP:http://dousoukaikouyukai.web.infoseek.co.jp
E-mail:rg-kouyu@rakuno.ac.jp

食品科学科小史

食品科学科長
中村　邦男

同窓生の皆様には、さまざまな分野でご活躍のことと存じます。食生活は、その時々の社会情勢を反映しながら時代とともに多様化し、戦後十数年の間、「食」に求められたものは栄養であったし、高度成長期には、嗜好性が注目された。その後環境汚染を含めて安全性が再認識され、「健康」と関わる栄養機能がこれらに加わることになった。さらに、食に対する健康志向がしだいに高まり、「食品」による病気の予防ばかりでなくＱＯＬの向上を含めて充実した社会生活を長く続けることにどれだけ「食」が貢献できるかが問われるようになってきた。このような社会情勢の中、1988年、全国に先駆けて酪農学部に食品科学科が開設され、現在では安藤功一、竹田保之（乳製品製造学）、鮫島邦彦、石下真人（肉製品製造学）、塩見徳夫、小野寺秀一（食品栄養化学）、菊地政則、村松圭（食品応用微生物学）、山本克博、岩崎智仁（応用生化学）、中村邦男（食品物性学）の11先生が在任しております。開設当時の先生方、皆お元気に活躍中であります。また、1998年には教養科に所属していた今村晋一郎（ドイツ語）、森本仁（数学）の２先生が加わりました。両先生とも退任され、お元気にお過ごしとのことです。2003年、上野岳史（数学）が着任されました。詳細は食品科学科10周年記念誌（1999）に載せてあります。2001年「健康」に向けて食と医分野の協力のもとに「人」「食品」「健康」が有機的に結びついた、二つの専攻をもつ食品科学科（食品科学専攻・健康栄養学専攻）が新たに発足し、完成年度にむけて整備充実がはかられています。後者は管理栄養士の育成を目指すものです。現在、石川紀子（栄養指導論）、小野輝夫（臨床栄養学）、菊地和美（給食管理学）、高橋セツ子（調理学）、真船直樹（栄養学）の５先生が加わりました。本学科の教育目標を達成すべくともに努力しているところであります。最後に皆様の益々のご発展をお祈り申し上げるとともに、本学科に対する一層のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

2003年度食品流通学科の動向

食品流通学科長
田村　　實

校友会の皆様にはますますお元気でお活躍のこととお慶び申しあげます。

今年度は酪農学園大学酪農学部５番目の学科（当時、獣医学科も含む）として誕生してから10年目と言う節目の年を迎えることが出来ました。本学科は学生総数が400名弱、スタッフが11名と本学の中で一番小さな学科であります。この小さな学科が「食」という人間の生活に欠かせないテーマを大上段に掲げ、生産から消費までを理解する卒業生を社会に送り出しながら、それぞれの分野で、研究してゆくことの大切さを考えることのできる学生を育てることを目的とし、学科として大きく成長しようと努力しているところです。節目の周年行事は学科全スタッフがはじめての経験のなかで、基調講演、パネルディスカッションを、そして記念誌として「食品流通学入門」の出版をメインとし、無事に終える事ができました。今年は本学園が70周年、お隣の学科農業経済学科が40周年の記念行事が行われました。それらと比較されての重圧に負けずに、酪農学部の末っ子学科の節目の行事としては合格点に値すると自負しております。10歳といえば人間ではギャング時代と呼ばれる時期であり、大人に逆らったり、大人から何でも吸収しようとし、大人には理解しがたい行動をとる年代でもあります。本学科もこのギャング時代を乗り越え、大人の学科へ成長してゆくための分岐点が、まさに今ではないかとも考えております。

最後に昨年から移動のあったスタッフをお知らせします。まず学科開設当初より学科発展にご尽力された山本博信先生が本学の教壇から去られました。新しく本学科唯一の独身先生として家串哲生先生が着任されました。

又、尾崎亨先生が本年９月より一年間ドイツに研究に行かれました。成果を期待しております。

少しずつ若返ってゆくスタッフで、学生と共に学科の発展のために目標に向かっているところです。

短期大学部酪農学科の現在と教員の動き

短期大学部　酪農学科長
佐々木　均

校友会会員の皆様には益々ご健勝でご活躍中のこととお喜び申し上げます。短期大学部は99年から酪農学科のみで、入学定員50名の日本一小さな短大となりましたが、学生・教員ともども日本一大きな志を抱いて日々学習・教育・研究そして普及に励んでいますことをまずご報告します。これも皆様方のご支援の賜と篤く感謝申し上げます。現在学科に所属する教員は総勢10名ですが、94年に土橋慶吉先生が、98年に市川舜先生が、さらに99年に坂本与市先生がそれぞれ定年を迎えられ退職されました。退職された先生方は、いずれもお元気でお過ごしです。なお、土橋先生はさいたま市にお住まいですので、関東支部の集まりなどの際にお声をかけていただければと思います。新任としては94年に水野直治教授を東京農大より迎えました。水野先生は02年３月に定年となりましたが、現在も非常勤としてお勤めです。また、98年には帯広畜大より寺脇良悟助教授（現在教授・家畜育種学）を、99年には教養学科から筒井静子講師（食物利用学）を迎え、現在に至っております。悲しい知らせもあります。02年４月９日に、植物育種学の海野芳太郎助教授が病のため急逝されました。学科にとってかけがえのない教員であっただけに誠に痛恨の極みでありました。そのような中、02年には幌加内町より我妻尚広助教授（資源植物学）が、03年には拓殖短大より岡本吉弘講師（植物育種学）と東北農研センターより名久井忠教授（持続型酪農論）が赴任し、新しい戦力として活躍中です。また、01年４月より安宅一夫教授が専任学長となりました。このように多くの教員が入れ換わりはしましたが、大学酪農学科の協力を得ながら、創立以来の理念と理想を基に02年に改訂したカリキュラムを、学科一丸となって実践し、目標の実現に向け努力していますので、今後とも変わらずご支援賜りますようお願い申し上げます。

再チャレンジ!!

中川郡豊頃町　酪農自営
井下　英透

平成15年９月26日午前４時50分、それは何の前触れも無しに突然おとずれた。「平成15年十勝沖地震」マグニチュード8.0、震度６弱、牛舎倒壊、24年間築き上げてきたアイリッチホルスタインはもう終わりか？24年間の酪農人生、山あり谷ありではあったが、順調そのものであった。学生時代、家畜飼養学研究室に籍を置き、楢崎先生、安宅先生より御指導をいただき、卒業論文では安宅先生の下チャレンジフィーディングが乳牛に及ぼす影響を研究。いかに一頭から多くの牛乳を生産するかを学んだ。その後の酪農人生まさにチャレンジの連続であった。多額の負債に苦しみながらも10年で牛群平均乳量10,000kg達成、平成４年11,000kg、平成８年12,000kg、平成11年13,000kg、そして平成13年13,884kg、平成14年14,376kg、二年連続の日本一、多くの方々より祝福を受けました。20,000kgを越えるスーパーカウにも10頭認定され、ハノバーヒル　エアロライン　リーンが４才型の乳脂量日本記録、アイリッチ　ルドルフ　エイダが４才型の乳量の日本記録を達成。全国各地からの視察がおとずれ、講演の依頼も次々と。それがまさに一瞬の出来事であった。

もう終わりか？何とか再建の方法はないのか？冬が近いのに牛舎が無い。でも人間と牛は無事である。大学の先生や先輩、後輩、そして同期の仲間をはじめ、全国の酪農業や関係者の方々から寄せられる見舞や激励の数々。その声に勇気を与えられ今、隣町に牛舎を借りて再スタートを切りました。今後の経営形態はこれから考えなければいけませんが、数年後、平成15年は震災ではなく、再スタートを切った節目となるよう、45才で再びチャレンジできる喜びをかみしめ、アイリッチを再び羽ばたかせたいと思います。そしてその事が今までお世話になった方々や、励まし、応援してくださる皆様への私の出来る恩返しと思っています。アイリッチホルスタインは必ず復活します。

（酪農学科18期、1980年度卒）

「道（みち）　程（のり）」

夕張郡長沼町HM牧場
向　　薫（旧姓　野中）

前日にタイマーセットされた洗濯機が回っている。

ポコポコと音をたて居間に広がるコーヒーの香り。その間、食卓に子供達の簡単な朝食が準備される。

コーヒーをすすりながら朝一番の天気予報を見ていざ牛舎へ。辺りは暗く、星空、ひんやりとした外気に澄みきった空気と草の匂い、静寂の中、私の一日が始まります。

大学を卒業してから18年、私立高校の教員を経て北海道長沼町の酪農家のもとへ嫁いで15年、只々駆け足の日々を送ってきました。酪農生活とは牛舎や畑作業は勿論、その他に大家族との同居と人間関係、自然の厳しさと現実を含めて成り立っています。特に人間関係は、仕事以上の仕事でその狭間で幾度となく挫折しそうになった事実もあります。子育ての最中には、育児を楽しむ余裕など皆無、三人の子供達とどのように過ごして来たかあまり記憶になく申し訳ない程です。その日一日を消化することで精一杯、無我夢中の日々を送っていました。しかし、そんな生活も子供達の成長と共に自身のペースで仕事も家庭も上手くこなせるようになり、今では良い想い出と後悔のない懸命に過ごした日々を愛しく思える程の15年の歩みとなりました。これも育児を通し「育自」ができ人間としてゆとりができたお陰かもしれません。こんな15年間の生活の中で常に葛藤してきた私ですが、今では酪農のことを「ラ・苦悩」から「楽苦農」へ、そして「楽農」へと感じられる程の気持ちが持てるようになった事について、「己の選択に後悔なし」と言えます。

私の住いは、長沼町馬追山丘陵に位置し、この町の田園風景が一望できます。初夏には青々と稲や牧草たちが風に吹かれ、夏の終わりには二番牧草や黄金色した麦ワラのロールが点在し、秋には稲々がそよぎ、晩秋には見渡す限りに紅葉が広がっているこの美しい自然に幾度となく心癒されたものです。

ここでの生活が私の性に合っているのかもしれないとこの風景を見るたびに思ってきたものです。

これからもこの自然と環境をもっと、もっと愛しく思える様に10年後、20年後の自分の人生に悔いなしと言えるよう前向きで実り多き人生を歩いていきたいと思っています。

（農業経済学科22期、1985年度卒）

独立開業から10年を経て「お蔭様で」

アニマルクリニックおかもと　院長
岡本　輝久

早いもので大学を卒業してから15年が経ってしまっていました。開業してから10年目の節目を迎えております。在学中は早く世に出て仕事がしたかったことを覚えています。卒業後、大学では学べない臨床現場でのいろいろな経験をし、諸先輩に出会い、その技を盗み、また指導してもらいようやく独立してもやって行けるだろうという自信を得て開業の準備に入りました。

資金調達のため事業計画をたてるにあたり、臨床現場では気にしていなかったコスト計算から病院レイアウトなどを練り上げ、さらに、開業場所を求めて札幌市内全域の動物病院の所在地を白地図に１軒１軒書込んで行き、空いている場所を探しました。空いているにはそれなりの理由があり、実際に現地に赴き、見て回り、将来性をこの目で確かめて行くという臨床とはかけ離れた地道な作業に没頭していました。

それらの苦労を苦とも思わないバイタリティーがまだあったのかもしれません。これから自分の進む道、逆戻りできない大きな分岐点という事もあり力が入っていたんでしょう。

現在は、経営を考えながらの臨床という、勤務医時代とはやや違った視点から臨床現場で活動していますが、いまも、「初心忘れるべからず」をモットーに動いているつもりです。

忘れていることも多いですが、今こうしてあるのも、大学での６年間と卒業後の数年間に学んだ事が非常に大きく影響していると思います。私にとって一番大きい財産は「人脈」です。多くの人たちにお世話になりました。「お蔭様で」今があることに日々感謝して診療に励んでおります。

（獣医学科19期、1985年度卒）

酪農学園大学同窓会校友会会報・第10号

「母校の誇りを胸に」

標津郡標津町役場
佐々木　尚

同窓生の皆様、こんにちは。私は道東の標津町で生まれ、地元の高校を卒業して平成３年に入学し、現在は出身地にある標津町役場に勤め７年が経過しました。卒業後、酪農学園大学卒ということで役場の農林課に配属になり、家畜の疾病予防や農業経営に係る業務等、食品科学と少し違う仕事をしています。配属当初は仕事柄、酪農学科か農業経済学科で学ぶべきだったとよく感じましたが仕事を通して畜産の専門的知識を身につけ、やはり社会ではなかなか習得できない食品科学の道で良かったと思っています。と言いつつ、食品科学の知識をもっているかと言うと在学中は柔道や遊技娯楽にのめり込み、存分に知識を習得しませんでした。しかし、現在でも交流のある良い友人に恵まれ充実した学生時代だったと思います。さて、地元の話に戻りますが標津町は鮭の漁獲高日本一と酪農家180戸ほどの漁業と酪農の町です。今般、地元では羅臼町と中標津町との市町村合併の話が注目されていますが、まだ、模索の段階であり合併した場合は日本一面積の広い街となります。

酪農業では、皆さんご承知のとおり今年11月から家畜ふん尿の管理法の施行に伴い、堆肥の野積みが禁止となりますが、現在、当町では低コストで地元水産廃棄物のホタテの貝殻を再利用した簡易堆肥貯留施設の建設を行うなど、農林水産の資源を利活用し、環境保全に調和した取り組みを進めています。私の日々の仕事は、机に一日中向かう日が半分を占めますが、土木作業が続く日もあれば、牛の肛門に綿棒を挿入し病原の検体を採取するなど毎日の仕事が違い生活に張りがあります。今後も酪農学園大学卒としての自覚を持って酪農現場で頑張り、私の夢でもある標津町の豊富な水産資源と酪農産物をマッチした加工品を特産品として生み出せればと思います。ちなみに、私の家系は、親子３代に渡っての酪農学園大学の卒業生であります。91歳になる祖父は北海道酪農義塾の卒業生であり１世紀近く大学にはお世話になっています。その誇りを胸に秘め、遠い未来に４代目を母校に入学させたいと思います。私自身まだ独身ですが。

（食品科学科５期、1995年度卒）

時間を有効に！

ＪＡ全農兵庫　畜産部畜産課
森本　尚資

私が酪農学園大学食品流通学科を卒業してから、いつのまにか早いもので６年が経過しようとしています。

卒業してからは、ずっと全国農業協同組合連合会兵庫県本部畜産部畜産課で働いています。神戸ビーフの販売等、畜産の中でも特に販売関係の仕事をしています。

仕事をしてしみじみと実感している事は、本当に時間の経つのが早いなぁということです。特に、最近は残業で遅くなる事が多く毎日が家と会社の往復だけのような生活で、気が付けば学生生活よりも長い６年の年月が過ぎ去ろうとしています。時々、“休日になるとぼーっとして今日は何しようかなぁ・・・”って考える余裕のあった学生時代が懐かしくなります。

私が学生の時には、「時間はたっぷりあるし、やろうと思えばいつでもできる」というつもりで、結局あまりいろんな事にはチャレンジすることなく気が付けば就職していました。今から考えるともっといろいろチャレンジしとけばよかったと後悔しています。私が学生の頃に言われた“学生の時は時間はあるけど金がない。社会人は金はあるけど時間がない。（社会人も金はないけど・・・）”という事も今の立場になってやっと“なるほど”と思えてきました。

そこで、在学中の皆様には、無理にとは言いませんが、時間がたっぷりある学生のうちに生涯の趣味となるような事を見つけてもらいたいです。また、色々なことに積極的に挑戦し色々な経験を積んでいってもらいたいです。そういった経験が今後の人生にとって必ず大きな財産となるはずです。と、言ってもなかなか実感がないと思いますが、とにかくせっかくの学生生活です！悔いのないよう時間を有効利用して下さい。

（食品流通学科１期、1997年度卒）

学生から職員へ

酪農学園大学教務部
仲野　恵子

経営環境学科を１期生として卒業してから、もう２年が経ちました。大学生活の４年間を振り返ってみると、様々なことが思い出されます。今まで道外の友人と出会う機会が少なかった私にとって、酪農学園で出会えた友人は大切な存在となりました。数え切れないほどの愉快なことや嬉しいことがあり、思い出されるのは楽しい思い出ばかりです。しかし、楽しいことだけではなく、悲しい出来事もありました。４年間という時間は、悲しい出来事にもしっかりと向き合って考えられる時間があり、新しく何かを始めることも、これまでの何かを変えていくのにも、ちょうど良い時間でした。今の私には大学での４年間は大きな意味を持っています。特別に人に誇れるような何かを成し遂げた、というわけではありませんが有意義で貴重な時間だったように感じられます。長かったようで短い４年間を経て、約１年間一般の企業に勤めた後、2003年４月から私は、母校の事務職員となりました。学生から職員という立場に変わったことで、学生の時には知りえなかった多くのことを知り、自分の快適な学生生活が多くの人々によって支えられていたのだということを実感しました。これまで多くの人々に支えられてきた分、これからは支える側として頑張っていきたいと思います。相手の求めている事に対して、自分のできる事とするべき事、してあげたい事の中で、迷い考える日々です。まだまだ今の私にできることはわずかしかなく、「支える」という段階ではありませんが、私の精一杯のできることによって、在学生にとって意味のある大学生活を応援し、お手伝いできればと思います。

（経営環境学科１期、2001年度卒）